

比較文化Ⅱ [第13回]

丸山純 (jun@site-shara.net) / <http://www.site-shara.net/daito/>

●イスラームの教義と音楽の是非

◆イスラーム教では、音楽を奨励しないのが一般的

ただし、教義上で禁止されているわけではない

『クルアーン』には、音楽の合法、非合法についての明文はない

『ハーディース』（預言者の言行に関する伝承）の一部に、音楽が聞こえてきた時に、ムハンマドが両耳をふさいだという言及があるにすぎない

『詩篇』をめぐる、肯定派と否定派が対立

旧約聖書に収められた150編の「神への賛美の詩」：ダビデ（ダーウード）作

（イスラームも旧約聖書を聖典とし、ダビデも預言者としている）

あなたの主は、天と地にある凡てのことを最もよく知っておられる。われは預言者たちの中のある者に、外の者以上の恵みを施し、またダーウードには詩篇を授けた（第17章55節）

肯定派：神がダーウードに美しい声や音楽の才能を与えた

否定派：ダーウードが詩篇を歌ったわけではない。詩篇に音楽や楽器が用いられたわけではない

◆禁止されるものではないが、宗教的には推奨できないもの

一般的に、「歌舞音曲はハラーム（禁止されるもの）ではないが、宗教的にはマクルーフ（推奨できないもの）」とされる

「麻薬や酒と同じく、人の理性的な判断を狂わせるもの」として音楽を禁止

サタンが音楽や歌で人間を興奮させ、アッラーの道から外そうとする

「あなたの（魅惑的な）声でかれらの中のできる限りの者を動揺させ、あなたの騎兵や歩兵でかれらを攻撃しなさい。かれらの財産や子供づくりに努力し、うまそうな約束を結べ。だが悪魔の約束は、欺瞞にすぎない」（第17章64節）

「だが人びとの中には、無益の話を買い込んで、知識もないくせに（人びとを）アッラーの道から背かせ、（正しい道に）嘲笑を浴びせる者がある。これらの者には、恥ずべき懲罰が下るであろう」（第3章6節）

イラン革命下やアフガニスタンのタリバン政権などが規制

その時代／国の宗教指導者の解釈によって、音楽の扱い方が変わる

●アザーンやクルアーンの朗誦は音楽ではない

◆宗教儀礼や宗教行為において、聖職者自身が「音楽」を実践

アザーンの朗誦^{ろうしやう} → 1日5回メッカに向かって祈る。祈りの時を告げる合図

非常に音楽的だが、しかし音楽ではない

言葉のもつ韻律が、音楽として聞こえてくる

クルアーンの朗誦 → 神を讃える

→ 西洋音楽で捉えられている『音楽』という概念を捨てなければならない

→ 外部の者には「音楽的」に聞こえても、文化の担い手にとっては音楽ではない

●イスラーム神秘主義には「音楽」が欠かせない

◆音楽で神との一体化を実現しようとするスーフィズム

スーフィーという言葉はアラビア語で羊毛を意味する「スーフ」に由来

世俗から離れて厳しい修行と神秘的な儀式（ハドラ）を執りおこなう

究極の目的は、「神に限りなく近づく／神と一体化すること」

歌舞音曲の効果で神秘的合一をはかろうとする

神の名を唱える修行「ズィクル」（唱念）

ズィクルを唱えながら回転したり首を振ったりすることで、トランス状態に陥る

スーフィー教団（タリーカ）によって、さまざまなスタイルがある

メヴレヴィー教団（トルコ・イラク）

シャーズィリア教団（北アフリカ～エジプト）

カーディリア教団（イラク／チェチェン）

本来のイスラームから離れているとして、イスラーム改革運動の標的となる

◆スーフィーの宗教歌謡「カッワーリ」

中世アラビア世界の神秘詩メッセージが起源

説教師「カッワール」たちの語りがインド亜大陸に伝来

土着の音楽と融合して「カッワーリ」に

神を讃えて歌う → 「イスラームのゴスペル」と呼ばれる

主唱者と副唱者の掛け合いが即興で続く

ハルモニウムとタブラ、手拍子が伴奏

◆ヌスラット・ファテ・アリ・ハーン

1948年にパンジャブ州のカッワール（カッワーリ演奏家）の家庭に生まれる

パキスタンでは、国民的な英雄

ピーター・ガブリエルのWOMAD出演後、世界的に人気に

ロックやヒップホップも取り入れながら、伝統的な歌を歌う

1997年に若くして死去

●流行のスーフィー・ロック

◆絶大な人気のパキスタンの3人組ロックバンド「Junoon」

1990年に結成

パキスタン人のアリー・アズマツ（ボーカル）

パキスタン系アメリカ人のサルマーン・アフマド（ギター）

アメリカ人（白人・妻はパキスタン人）のブライアン・オコーネル（ベース）

現在はブライアンは脱退

「お前は音楽に取り憑かれておる」と老人が語る夢を見たことから、グループ名を「Junoon=執心、狂気」に

政府による音楽活動の制限

1997年……パキスタン政府が、若者の欧米文化への傾倒に危機感を持つ

他の若いミュージシャンたちと活動制限に

1998年……インドで爆発的人気に

インタビューで印・パ関係の改善と核兵器反対の発言をしたことから、パキスタン

で国家反逆罪と告発され、警察から搜索や盗聴を受ける

1999年……ムシャラフ軍事政権に代わり、活動が自由に

2000年……来日

▼Junoonのスタイル

ロック（ボーカル・ギター・ドラムス・ベース・キーボード）+ タブラやドールラクなどの伝統的楽器が加わった個性的なスタイル

パキスタンの民謡やイスラームの宗教歌などがうまくミックス

歌詞はきわめて宗教的。一見ラブソングのようでも、神への愛を歌う

それでいて、パキスタンの若者から熱狂的な支持を受ける

さらに、世界に出ていって、国際的な評価を受ける

歌詞：Sayonee 「愛しい人よ」

愛しい人よ 愛しい人よ／片時も 心は休まず

しかも 悩みは消えず／愛しい人よ 愛しい人よ

駱駝^{らくだ}の手綱の向きを変えるのは誰？

そんな愛しい人もいない

限られた人間の力／今日はあっても 明日はない

僕の過ちなど気にするな／君はしょせん僕には狂わない人

歌詞：Dama dam mast Qalandar 「愛しきカランドル様」

おお いとしの聖者様 私の敬意をお受け下さい

偉大なるジューレー・ラール様（インダス川の守護者）

スインドリーにおわし、セヘワーンに眠られる

慈悲深き聖者シャハバーズ・カランドル

太鼓の轟音の中に酔い踊るカランドル

アリーに最も近いお方

慈悲深き聖者シャハバーズ・カランドル

●BBCドキュメンタリー番組「Rock Star」

【Scene 1 バスに乗って】

パキスタンの北西辺境州ペシャワルでは原理主義政権が支配して音楽の演奏を禁止しているが、どうしてそのような法案ができてしまったのだろうか。音楽がどの程度禁止されているか現状を見るために、バスに乗って乗客と話をする。

Salman 「音楽家が音楽を演奏することを禁止されているけど、なぜかな？」
乗客 「政府が禁止しているからだよ」
Salman 「どうして禁止するの？」
乗客 「地方政府がそう言うのさ。でも彼等自身も陰で歌を聞いているんだ」

【Scene 2 CD屋で】

店は閉まっているけど、カウンターの下でCDを買うことはできる。
Salman 「なぜ棚は空なの？ 音楽禁止令が出ているっていうけど」
店員 「そうさ」
Salman 「禁止令によって店の損害は？」
店員 「もちろん被害甚大さ」
Salman 「抗議しないの？」
店員 「したさ。ストライキをしたよ。でも地元の政府は許さないんだ。他の仕事を斡旋してくれると言う。どんな仕事をしてもいいと言うけど、音楽の商売だけはだめなんだとき。猥雑だと言うんだ」
Salman 「ええっ？ いったいどこが猥雑なんだ？」

【Scene 3 マドラッサ(宗教学校)で】

マドラッサにおいてさえ、Salmanは有名だ。音楽が禁止されている宗教学校に、あえてギターを持って行く。
Salman 「私が音楽家だということを知っているよね。音楽を演奏し、音楽を作ることが、神が私に与えた使命だ。だけど人々は、私がしていることは罪だと言う。そう言われると、とても腹がたつんだ」
学生1 「音楽のことはあまり知らないけど、長老たちからは音楽を避けるようにとされている。音楽に近づいてはならない。音楽を聞いてはならない。音楽に心を奪われてはならない。音楽をする人と親しくなってはならないとね」
Salman 「でも、今私と一緒にいるじゃない。なぜ？ 私はあなたの敵なの？」
学生2 「そんなことはないですよ。あなたの髪は素敵ですね」

Salman 「そう？ 神が私に与えてくれたんだ。ギター弾いてあげよう。聞いてみて。気に入るかどうか」

Salmanはギターにクルアーン（コーラン）のフレーズをのせて歌う。

Salman 「こうやって、私は心の平穏を見いだすんだ」
学生2 「あなたは知らないようだから、教えてあげましょう。このことはもっとよく勉強する必要があります。クルアーンは音楽を完全に禁止しています。クルアーンを歌ってははいけません」。
Salman 「誰がそう言うの？ 証拠を見せて。クルアーンに書いてあるというけど、どこに書いてあるの？ 見せてよ。そんなことを言う指導者はいったいどこにいるの？ 連れてきてほしいな」

【Scene 4 宗教指導者Mohamad Amirと】

精力的な説教で「電気ムラー」のあだ名がついたMohamad Amir。
Salman 「なぜ世界の52のムスリム国家では、音楽が禁止されていないのでしょうか？」
Amir 「この52カ国は、イスラムの本当の意味を知っているだろうか？」
Salman 「彼らは全員、異教徒だということですか？」
Amir 「そう。みんな豚さ。イラクは燃えている。そのことを非難している者がいるだろうか？」
Salman 「いい加減にしてくださいよ。世界中が（アメリカがしていることに）抗議しているじゃないですか」
Amir 「世界はみんなアメリカの奴隷だ」

【Scene 5 スーフィー(神秘主義)の聖者Shahbaaz Qalandar*の廟で】

巡礼者 「聖者様をお参りするために、この聖なる場所に来るんだ。祈るんだよ。そうすると望みがかなう。こんな風にして聖者様に呼びかけるんだ（実演してみせる）。そしてアッラーと彼の預言者に対する愛を証明するのさ」

*Shahbaaz Qalandar……13世紀のスーフィー（イスラーム神秘主義）の聖人。スィンド州のセーワンに住む命日には毎年時巡礼者が廟に集まり、一晩中音楽を演奏（ウルスの祭り）。カッワーリも演奏される

【Scene 6 宗教連合政党のHafiz Aliと】

原理主義を掲げる宗教連合政党のHafiz Aliは、スーフィーは音楽を媒介とするものではないと語る。
Hafiz Ali「楽器の演奏はスーフィー（神秘主義）とは無関係だ。スーフィーは、純粋な内なる自己を追求することを目的とする。自己とアラーとの一体感を求める。これがスーフィズムだ。イスラムには、音楽のための場所はない。パキスタンにとって、原理主義は外から入ってき

たものである。サウジアラビア（のワッハーブ派）やアフガニスタンのタリバンが持ち込んだものだ。一般のパキスタン人たちは、自分たちの伝統に反するものだと感じている。

【Scene 7 再び宗教指導者Mohamad Amirと】

Salman 「世界のムスリム（イスラーム教徒）以外は、どうなるのでしょうか？」

Amir 「この世の中では、それぞれ繁栄していくだろう」

Salman 「そしてあの世では？」

Amir 「ムスリムだけが繁栄する」

Salman 「今日はどうもありがとうございました」

Amir 「怒ってはいないだろうね」

Salman 「私が質問しに来たんですよ。なんで怒る必要があるのですか？」

Amir 「これからもちよくちよく来なさい」

Salman 「また私に会いたいというのですか？ だって私は罪人ですよ。私の履いているサンダルでさえ罪深いとあなたは言ったじゃないですか」

Amir 「そんなことはない。心から言ってるんだ」

驚いたことに、Mohamad Amirは歌を歌いはじめる。しかし彼にとっては、これは「音楽」ではないのだ。

Amir 「これをロンドンで歌いなさい」

Salman 「ロンドンの人たちに何を歌えというのですか」

Amir 「彼は、世界の道しるべ
メディナ*に住み、すべてのムスリムの心の中に住む
アラーに対して忠実な者
彼はメディナの真の住民
彼の人生には迷いはなく、妬みもなく
あなたがアラーの家のそばに住んでいようと
唯一絶対の神の言葉を広める使命を負っていようと
より良い人間が
この世の中で、預言者の道をたどっていく」

*メディナ……メッカに次ぐイスラムの聖地（サウジアラビア）。ムハンマドの墓がある

▼コークスタジオ

コカコーラ・パキスタン社が提供する音楽番組

伝統音楽と現代音楽（ポップス）のコラボレーションによる新しい音楽の創造をめざす

ジュヌーンのメンバーも参加し、南アジアで大きな人気を呼ぶ

●イスラーム過激主義と音楽

▼過激派のビデオの背景に流れるジハード・ナシード

アルカイダ系が、大量のプロパガンダビデオを制作してネットに流通

ジハード（聖戦）やシャヒード（殉教）を賛美し、イスラーム主義を標榜

テロリズムが一般の人々の生活の中にまで入り込む一助となる

ナシードを聴くことが一部の若いムスリムの間でトレンドに

クルアーンの朗誦とも似た抑揚のある旋律を持つもの

男声の多声合唱／打楽器やシンセサイザーを伴うもの／ラップ調のもの

音楽に厳格なイスラーム主義なのに、なぜ「非イスラーム的な響き」を持つ音楽を使うのか？

詩の朗誦は「音楽」ではない／シンセサイザーは、人ではなく機械が演奏しているもの

▼宗教歌としてのナシードの確立とジハード・ナシードへの進化

「ナシード」とは、アラビア語で「詩を美しく朗誦^{ろうしやう}する」という動詞に派生する名詞

ももとは、ジハードとは関係ない

エジプトでナセル大統領による弾圧が強まる時代に熱弁をふるう「カセット説法師」が活躍

クルアーンやハディースの節を、詩の朗誦のように聴衆に語りかける

獄中で服役中のムスリム同胞団の活動家たちの間で、ナシードが口ずさまれていく

アブ・マジンという歌い手が1968年にナシードのカセット・アルバムを発表

ソ連のアフガニスタン侵攻（1979～）で、ジハードを歌うようになる

戦闘員（ジハーディスト）たちが戦場で自作のナシードを披露 → 戦死（殉教）

パレスチナ紛争の悲劇的シーンが、衛星放送を通じて世界に発信される

90年代には、欧州の若者たちをボスニアやチェチェン（ロシア）に送り込む

戦場へと駆り立てる勇ましい軍歌調のものも増えてくる

コンピュータを使った音楽・映像編集が一般化 → ジハード・ナシードの制作が容易に

特別なスタジオなしでもプロパガンダビデオが作れる時代になった

現代的な音楽の手法（ノリ）でリミックスされ、ネットを通じて拡散されていく

単なる音楽として聴いている者も少なくないが、裏側にはイスラーム過激思想が潜む

戦場や模様やイスラームの弾圧や被害の映像と一体化すると、強い感情を引き起こす

（世界発2016）宗派共存「中東のスイス」 オマーン 並んで礼拝、結婚も

朝日新聞デジタル／2016年1月13日05時00分

宗教指導者の処刑と大使館襲撃をめぐって断交したサウジアラビアとイラン。イスラーム教の宗派の違いが中東を引き裂こうとしているようにも見える。しかし、アラビア半島のオマーンでは、全く異なる風景が広がっていた。

金曜日の昼すぎ。首都マスカット西部のモスク（イスラーム教礼拝所）に家族連れが集まってきた。恒例の集団礼拝の時間だ。

堂内に入りきれなかった人たちが芝生の上で祈り始めた。スンニー派式に両手をひじにあてて人もいれば、シーア派のように両腕を垂らす人もいる。

「ここではスンナ派もシーア派も一緒に祈る」と説教師のブサイドさん。このモスクはイバード派という宗派に属するが、他宗派を拒むことはない。

ブサイドさんによると、オマーン国民の過半数はイバード派。7世紀後半に現在のイラクで始まり、オマーンで広がったとされる宗派だ。預言者ムハンマドの後継者について「血筋」にこだわらないところはスンニー派に近く、ウマイヤ朝（661～750）から離反した歴史的な経緯はシーア派と共通する。

特徴は寛容さだ。オマーンはインドやペルシャとの交易で栄えた。18世紀ごろには東アフリカの一部も領土とし、さまざまな土地の出身者が国民となったことが影響したようだ。サウジなどほかの湾岸諸国と違い、街では顔を覆う「ニカブ」をつけていない女性を多く見かける。外国人がアルコールを飲むことにも寛容だ。

宗派間の結婚も珍しくない。弁護士ユセフ・ブサイディさん（25）は父がイバード派、母がシーア派だ。「僕らのような若い世代では、自分が何派かわからない人が多い」と話す。

過激派による大規模なテロも起きていない。特定の宗派を標的にする理由が存在しないことも、一因とみられる。

■融和策、国王が推進 公務員、宗派欄なし／教科書、祈る姿さまざま

オマーンの寛容さは、カブース国王（75）によるところも大きい。

オマーンは1971年、英国の保護領から独立。当時、首都を含む北部と、反政府運動が強まる南部の対立が深まっていた。部族対立を通じ、宗派対立に発展する恐れもあった。

70年に即位したカブース国王は国をまとめるため、前国王が逮捕した政治犯らに恩赦を出すなど融和策を強力に推し進めた。

公務員の採用願書から宗派の記入欄をなくし、教科書には人々が違う方法で祈る姿を描いた。イバード派が多数派であること以外、宗派別の人口統計は公にされていない。「政府が意図的にあいまいにしている」（研究者）という。

「宗派のことを話せば、逆に人々から疎まれる」と語るのは、昨年10月の諮問議会選挙で当選

したタウフィーク・ラワティ氏。宗派別の政党は存在せず、選挙活動ではもっぱら交通渋滞の解消や教育制度改革などを訴えた。

国政の実権はカブース国王にあり、民主化という点では議会制民主主義を採るイラクなどに立ち遅れている。それでもカブース国王への支持は高い。ラワティ氏は「99%が同じスンニー派と言われるリビアでは内戦状態が続く。イラクでは政党が宗派別に争っている。対立を生むのはいつも政治であり、宗教ではない」と話す。

■外交でもバランス配慮 サウジやイランと良好、過去に仲介

オマーンは外交でもカギを握る。サウジなどスンナ派諸国と同盟関係を結びつつ、シーア派のイランとも良好な関係を維持。「中東のスイス」と呼ばれる。日本が6割以上を依存するペルシャ湾岸の原油はホルムズ海峡のオマーン領海を通る。日本のエネルギーの安定供給に欠かせない存在だ。

ホルムズ海峡の封鎖が取りざたされたイランの核開発問題をめぐっても、オマーンは米国とイランに秘密協議の場を提供した。

隣国イエメンのシーア派武装組織フーシに対するサウジ主導の軍事介入には加わらず、交渉窓口役に徹する。英エクセター大のマーク・バレイ湾岸研究センター長は「オマーンがバランスに配慮するのは国家維持のため。地域が混乱すれば、自国が吹き飛びかねないことを国王は自覚している」と話す。

1987年にサウジで起きたイラン人巡礼者と治安部隊の衝突などをめぐり、サウジとイランが翌年断交した際、仲介役を務めて91年の国交回復を実現したのはカブース国王だった。

今月、サウジがシーア派の宗教指導者を処刑したことをきっかけにサウジとイランは再び断交。オマーンは9日、湾岸協力会議（GCC）の一員として「サウジ支持」を確認したものの中立的な立場を貫く。緊張を解くため、今回もカブース国王が動いているとの報道もある。

そんなオマーンにも、宗派対立の影響が及びはじめたとの見方がある。マスカット大学のハイデル・ラワティ学長は、ソーシャルメディアなどで、宗派を理由に国の政策を批判する言動が増えたと感じている。

子どもがいないカブース国王は後継指名をしていないため、死去後の国政の混乱を予期する指摘もある。それでも、ラワティ学長は「オマーン人は『寛容』という価値観を捨てない。誰が国王になっても、国のまとまりは揺るがない」と話す。（マスカット＝渡辺淳基）

◆キーワード

<オマーン> アラビア半島の東端に位置する絶対君主国。外国人を含む人口は約433万人。石油や石油製品の輸出を主な産業とし、石油生産は日量94万5千バレル（2013年）で世界20位。千夜一夜物語で描かれたシンドバッドは、中国へ航海したオマーン人船乗りがモデルだったとされる。